第 518 号
2026 年 11 月 27 日

土佐のわらべ

オーテピア高知図書館
子どもの本の読書会だより

《第 540 回(2026 年 11 月 15 日) 子どもの本の読書会記録》 参加者:11 人
時間:10:00～11:30 場所:オーテピア 4 階集会室

『サンサン』曹 文軒／著, 中 由美子／訳, 和歌山 静子／画 てらいんく

11月は世界の本の読書会を開催しました。高知市国際交流員の施さん(中国出身)をゲストにお招きし、中国の小説『サンサン』を読みました。文化大革命直前の中国の田舎の村を舞台に、油麻池小学校に通うサンサンと子どもたちの友情と成長を情緒豊かに描いた物語です。次に、読書会に参加した方の感想を紹介します。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

●チンばばは、苦労して手に入れた理想の土地が奪われても、自分の主張を曲げないところが凄い。サンサンがチアン先生とパイ・チュエの手紙に関わる場面で、「これは普通の児童文学ではない」と感じ、惹き込まれた。

●物語が時系列順ではないので戸惑った。紙月とホェイス和尚の関係性、そしてシャオカンの将来が気になったが、続編はあるのだろうか。ハゲツルが自分の見た目に対する周りの反応を「いじめ」とは受け止めず成長していくところ、そして逆境でのシャオカンの生き方に昔の人の持つたくましさを感じた。

●子どもが子どもであることの大切さを感じた。村の中の親子や男女の関係に様々な事情が見受けられたが、それらが大らかに表現されている。中国の人は、「文化大革命」のあった時代のことをどのように感じているのだろうか。P.159 に「新しい太陽」についての記述があり、元首と国民の考え方の間に差があったことが感じ取れた。

●楽しく読んでいたが、帯にある「文化大革命」のことを調べ、いろいろと考えてしまった。作中の自然の描写が良い。葦の根や菱の実が食べれることに驚いた。サンサンが父から殴られる場面は、今だと気になる人が多いかもしれない。

●良い時代の良い子ども時代を描いたお話。サンサンの病が治ったことが心に残った。時系列ではなかったが、人との繋がりで物語がまとめれていたので納得できた。細馬とサンサンの交流、心の凸凹を抱えたシャオカン、チアン先生の恋など中国の農村の1人1人の関係の濃さ・人間の濃さに、現代日本との違いを感じた。

●今回は、中国の方が来てくれるのをとても楽しみにしていた。親子や人と人とのコミュニケーションに時代は関係ない。今も昔も人(子ども)の持つ感情や思いは変わってないんじゃないだろうか。

●『サンサン』は著者が自分の経験をもとに書いた作品。時系列順じゃないという指摘について、これは中国の小説によく見られる特徴。読者が自分の中で時系列を整理しながら読んでいく。子どもたちはいろいろな苦難があって成長するが、個人的には「苦難が無くても良いんじゃないか？」と疑問に感じた。サンサンの病状を心配しながら読んだが、後でエピローグにヒントがあったことに気づかされた。

●昔話以外で中国のお話を読むことが無かったが、とても良かった。サンサンという子どもと各章で語られる人物の日常が描かれており、中国という国のことも垣間見える。サンサンは校長の息子だが、優等生ではなく、意地悪も悪戯する。やんちゃが過ぎることもあるが、根はいい子だ。個人的にお話で一番惹かれて、「強い」と思った人物はチンばば。彼女が学校に住んでいるわけ、そしてその生き様は強烈だった。

●各章で1人の人とサンサンの話が書かれていることが分かって、読みやすくなった。チンばばは、ある子どもを川から助けたことで周りに理解者が増え、それをきっかけに彼女自身も学校のことを大事に思えるようになったんだと感じた。子どもたちを大切に思う優しいやりとりが良かった。

●表紙のサンサンの表情が左右でまるで違って見える。人間の表面性と内面性を表しているように感じた。P.200 に「つえをつき てんそくの足で」とあり、チンばばが杖をついていた理由が、高齢だけでないことに気づかされた。また、「白いハト」「ホワイトカラー」「白い帽子」「白い上着」など、“白色”がキーワードのようにも感じた。

次回 12 月 10 日(木)10:00～11:30 オーテピア 4 階集会室
📖『ある星の汽車』 森 洋子／著 福音館書店
※申込み・参加費は不要です。